Grit（やり抜く力）と大学中退の関連の検討

An Examination of the Relationship between Grit and College Student Dropout

大仁田　香織

福島工業高等専門学校　ビジネスコミュニケーション学科

ONITA Kaori

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of Business Communication

（2022年9月5日受理）

Under the circumstances, screening method of students at risk of dropout has been based on students' educational data, such as entrance examination results, academic performance, and absence from class. Previous studies, it was suggested the possibility of using the Grit scale as a screening method for students at risk of dropout. Grit is passion and perseverance for long-term goals. Grit comes the consistency of interests and the tenacity of effort that lead to goal achievement. Grit scale, it was possible to predict a public high school potential dropout and job retention.

Universities and colleges need early detection and early support to prevent from dropout. The Grit scale measure Grit scores and the score displays the reflecting students' personal behaviors. I considered Grit scores are useful to support students. This paper study to both students of college dropouts and graduates.

As a result, the Grit scores of college dropouts were lower than those of the college graduates. It is suggested thus arises the possibility that Grit scores may more reliably predict dropout and Grit scale uses in a screening method for students at risk of dropout.

Key words: Grit, Grit score, College student dropout, Student support

1. はじめに

少子化の中、大学進学意欲の高まりと定員拡大により大学・短大の学生数は、2000年度の約274万人から2020年度には、約292万人へ増加した[1)]。他方、大学中途退学者数は、2020年度約5.79万人、2021年度約5.78万人であった[2)]。年間5万人以上が大学を中途退学（以下、中退とする。）している状況から、文部科学省及び各大学は、学生への経済的支援、学生相談の拡充、組織横断型の支援体制の構築等の学生支援を強化している。一方で、どの学生が中退するのか、どのような対応を行えばよいかが、大学教職員の経験や直感に依存しがちであることが指摘されている[3)]。また、中退防止施策は、個別対応から組織的な対応に向かっているとされているが、そのためのデータ統合等の組織としてのインフラを整える必要があることが指摘されている[4)]。本稿は、大学教職員の経験や直感に依存せず、組織で行うことが可能な学生支援について検討することとした。

2. 大学中退

2.1 中退が及ぼす影響

中退による学生及び大学への影響は少なくない。学生への影響については、大学・大学院中退者は、大学を卒業した者に比べ、退学してから就業までの期間が長い傾向にある。また、20代の大学中退者の6割前後に正社員経験がなく、無業や失業のリスクが高いことが指摘されている[5)]。大学への影響については、経営、教育の質、大学評価等にかかわる。こうした問題意識にもとづき、本稿は、学生及び大学に負の影響を与えることが多い中退に着目した。

2.2 中退理由

大学中退理由から中退者の傾向をみていく。中退理由について、文部科学省調査 2020 年の中退者数の内訳は、「経済的困窮」（19.3%）、「学生生活不適応・修学意欲低下」（18.3%）[6)]。労働政策研究･研修機構の調査（複数回答）では、「勉強に興味・関心が持てなかった」（51.8%）、「単位が不足した」（49.0%）、「経済的に苦しかった」（29.6%）[5)]。継続的に休退学者関連の調査を実施している内田は、中退理由について、「消極的理由（大学教育路線から離れる退学）」（53.82%）、「積極的理由（海外留学や他大学への進路変更）」（17.65%）、「環境要因（家庭の都合、経済的理由）」（6.76%）と報

告している[7]。これらの調査から、消極的な理由で中退している学生が多いといえる。現在、文部科学省及び各大学が、学生への経済的支援を拡充しており、本稿は、消極的な中退理由である「学生生活不適応・修学意欲低下」に焦点を当てることとした。

文部科学省は、学生生活不適応・修学意欲低下及び経済的困窮による中退が中心的な理由であったことから、学生への十分な配慮が必要であるとし、高等教育機関に柔軟な対応を依頼している[6]。先行研究では、大学不適応感及び関連要因を測定するために大学生を対象とした調査を行っている。この調査における「大学不適応感」についての質問項目には、「大学をやめようかと思ったことがある」、「まだ授業があるのに意欲がわかなくて大学から早めに帰宅したいと思うことがある」、「授業がある日なのに大学を休みたくなることがある」といった質問項目を用いている。この先行研究の結果では、男女共に「大学不適応感」と「授業理解の困難さ」との間に有意な正の相関がみられたことを示している。また、「授業理解の困難さ」については、「大学の勉強についていけない感じだ」、「授業の内容が難しいと思う」、「大学での勉強方法がわからない」といった質問項目となっており[8]、「大学不適応感」と「授業理解の困難さ」には関連があり、学修意欲が学生生活不適応に影響しているのではないか。

2.3 大学不適応

大学不適応に関しては、授業理解、友人関係、入学目的に関連があるとされている[9]。青年の学校適応感や不適応感は、対人関係(友人関係や教師との関係)、学業といった要因で測定されてきたが、認知や感情に焦点を当てた適応感尺度が必要であることが示されている[10]。

中退に関連した研究では、成績が中退に影響するが、社会心理学的要因及び環境的要因は、大学適応とコミットメントに影響し、これらが中退に直接関係することが指摘されている[11]。中退が経済的な要因であっても、その中には人間関係の不適応、大学の不適応、教学の準備不足等、複数の要因を解決する必要があることが示されている[4]。また、大学入学という目標を達成した新入生に対し、新たな目標を大学生活の中で設定できるような支援、大学における多様な活動に積極的に参加することで大学適応が促進されることが示唆されている[12]。先行研究から大学不適応の学生への支援では、人間関係や学業だけでなく、学生の認知や感情に焦点を当てた測定及び支援が必要であるといえる。

2.4 中退予測

中退防止には、個人（教職員）と組織で行う施策があり、昨今の多様な学生の入学によって多様な支援が求められているが、個人で対応することには限界がある。このような状況から、中退しそうな学生を入学前に予測し、組織的に支援していくアプローチ及び入学した学生の今後を予測し、中退させないようにするカリキュラムデザインの作成が検討されている[13]。教育ビッグデータから中退可能性のある学生を早期発見するシステムの各大学の取り組みについて整理した先行研究では、学生の基本情報、出欠、課題提出、入試、成績、GPA（成績評価値）、取得単位等を用い、これらのデータから修学上の問題、留年や中退の傾向を統計的に算出し、要注意とされる学生の抽出が可能とされている。一方で、教育ビッグデータを用いる支援の課題として、カリキュラムや学生の状況の違いから各大学での取り組みを一般化することが難しいとの見解が示されている[14]。また、学業と同等またはそれ以上に感情的及び社会的な項目が、中退可能性を予測することが指摘されており[15]、入試や成績といった教育データでは測れない感情的及び社会的な要因が、中退に影響するといえる。教育データのみで昨今の多様な学生の状況を把握し、支援することは難しいといえ、中退予測を新たなアプローチで検討することが必要なのではないか。

3. 中退予測の感情的・社会的アプローチ

ここまで中退理由である大学適応及び中退予測についての先行研究を概観してきたが、課題がいくつかみられた。本稿は、中退リスクのある学生支援に向けた新たなアプローチとして、やり抜く力から目標達成を予測するGrit の概念に着目した。この概念は、Grit スコアから、公立高校の中退、米軍士官学校の離脱、営業職の離職、離婚が予測可能としている[16]。日本におけるGrit研究では、専門学校の休退学者及び欠席の多い学生と就学に問題のない学生を比較した研究がある。この先行研究では、休退学者及び欠席の多い学生のGrit スコア平均値（以下、Grit スコア）が就学に問題のない学生に比べ低く、Grit スコアをもとにした学生への早期支援の可能性が示唆されている[17]。また、Grit は育成可能とされ、小学生を対象とした研究では、Grit を育成することで、学級適応やスクールモラールを高めることが示唆されており[18]、本稿は、Grit の概念で中退予測及び支援の検討を試みることとした。

4. 本稿の目的

中退防止には、中退リスクのある学生を早期に発見することが有効とされ、学生の教育データを活用した学生支援が導入されている。一方で、課題提出、成績といった学業に関わるデータだけで学生の状況を把握することが難しいとされている[3]。本稿は、学業や目標達成との関連が深く、中退や離職が予測可能とされるGritの概念に着目し、日本の大学中退者及び大学卒業者を対象とした調査を行い、日本の大学の学生支援にGrit尺度を用いることができるかを検討する。

5. Grit（やり抜く力）

Gritは、Angela Duckworth博士が提唱した概念で、「成しとげる力」[19]、「やり抜く力」[20]と日本語訳されている。本稿では、Gritの日本語訳を「やり抜く力」とする。Gritは、ポジティブ心理学を起源とし、Guts（闘志）、Resilience（粘り強さ）、Initiative（自発）、Tenacity（執念）の頭字語であり、長期的な目標に対する忍耐力と情熱と定義されている[16]。

先行研究から、失敗、逆境、停滞が続いている状態においても、成功や進歩は、才能によるものだけではなく、長期間の努力と関心を維持し、課題に向けて精力的に取り組むこと（Grit）が、成功や進歩につながることが示唆されている[16]。また、学生の縦断的なGPAの予測、英語スペルコンテストの最終ラウンド進出者の予測とGritスコアの関係が明らかになっており、Gritと目標達成の関係が示唆されている[21]。

Gritスコアを測る尺度は、12項目のフルバージョンと8項目の短縮版があり、フルバージョンを改良した短縮版[21]が多く用いられている。短縮版のGrit尺度を用いた結果には、陸軍特殊作戦部隊の選抜プログラムの達成予測の妥当性、Gritが卒業可能性を高めること、Gritが学業への誠実さや意欲に影響を与えることが示唆されている[22]。

日本のGrit関連研究は、主に教育、心理学の分野で行われている。例えば、Gritとマインドセットとの関連[23]、Gritと目標達成及び数学の成績の関連[24]、スポーツや勉学で目標達成や克服を経験した者はGrit、楽観性、資質的・獲得的レジリエンスが高いことが示されている[25]。医療技術者養成校において、学内教育レベルは十分であっても実習の中断や単位不認定となる学生には、やり抜く力（Grit）を高める予防的心理教育が有益であること[26]、個人属性別のGritとバーンアウトの関係が研究されている[27]。先行研究から感情や目標達成にGritが関連することが明らかになっている。大学生は、基本的には4年ないし6年間、学業を継続することで卒業が可能となり、長期間に渡る目標を達成するGrit（やり抜く力）が必要といえる。Gritと中退に関する先行研究では、休退学の可能性が高い学生を事前に把握し、より良い指導を行っていくことの検討にGritが用いられている[17]。他方、本稿は、大学中退者及び大学卒業者を対象としており、先行研究と対象が異なる。また、本稿は、中退者の特性の把握の検討にGritの概念を用いることとした。

6. 調査

本稿は、大学中退者のGrit傾向を検討するために大学中退者と大学卒業者を対象とした調査を実施した。調査は、スクリーニング及び質問紙調査を2022年7月に行った。調査対象は、インターネット調査会社に登録しているモニターに対してスクリーニングを行い、大学中退者及び大学卒業者を抽出した。本スクリーニングにおける大学進学率は46%、中退率は6%で、調査対象者の大学進学率[28]及び卒業までの退学率[29]に近い値であった。調査対象者の内訳は、年齢22歳から31歳（平均年齢27.0歳）、居住地全国、現在の職業は不問とし、大学中退または大学を卒業した男女各50人、合計200人を対象とした。

本稿は、大学を中退または卒業後、数年経過した者にGritスコアを調査している。先行研究からGritスコアは、年齢とともに増加する傾向が明示されているが、年齢別の調査において、教育レベルがコントロールされている場合において25歳から34歳、35歳から44歳、45歳から55歳の年齢区分のGritスコアの有意差がないことが示されている。一方で、65歳以上では、年齢区分内のGritスコアの差が大きくなり、Gritが過去の経験に影響を受けることが示唆されている[16]。本調査の対象者は、大学中退者及び大学卒業者であり、教育レベルがコントロールされている。また、調査対象者の年齢が65歳以下であることから大学在学時からの時間の経過が、調査対象者のGritスコアに影響を与えないものと考えた。

質問紙は、8項目の短縮版のGrit尺度[21]を西川らが日本語訳したGrit尺度[30]を用いた。質問項目は、「始めたことは、何であれやり遂げる」、「頑張りやである」等の8項目で構成され、回答は、1＝当てはまらない、2＝やや当てはまらない、3＝どちらとも言えない、4＝やや当てはまる、5＝当てはまるの5件法とした。

倫理的配慮については、依頼したインターネット調査会社から倫理的に問題がないことが事前確認されている。

回答者には、回答したことが特定されることはないこと。回収した調査データを目的以外に使用しないこと。調査に協力しなかったことで不利益を被ることがないことを説明し、同意を得られた者に対し調査を行った。

7. 結果

調査項目に対して因子構造を確認するために最尤法による因子分析を行い（Table 1）、2 つの因子が抽出された。Grit 尺度の原版を作成した Duckworth ら（2007）での因子構造では 2 因子を抽出している[16]。日本語版 Grit 尺度の作成及び信頼性・妥当性を検討した竹橋ら（2019）は、日本語版 Grit の因子分析を行い、確証的因子分析の適合度が高い因子解の良好なセットとして、第 1 因子「興味の一貫性」、第 2 因子「努力の粘り強さ」からなる 2 因子構造を得たことを示している[19]。また、西川ら（2015）は、8 項目の短縮版の Grit 尺度の日本語版を作成し、因子構造の確認及び妥当性の検討を行っている。大学生約 1,000 人を対象とした 8 項目の因子構造の確認では、Duckworth の原版の Grit-S 尺度（短縮版の Grit 尺度）と同様の 2 因子が適切であることが判断され、第 1 因子を「根気」、第 2 因子を「一貫性」と命名している[30]。竹橋ら（2019）[19]と西川ら（2015）[30]の日本語版の Grit 尺度の作成及び信頼性の検討結果では、Duckworth の原版[16]同様、2 因子構造が明示された。本稿では、この 2 つの因子を西川らよりも原版に近い邦訳となっている竹橋ら（2019）が命名した「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」[19]を用いることとした。

Duckworth ら（2007）[16]、竹橋ら（2019）[19]、西川ら（2015）[30]にもとづき、「興味の一貫性」に含まれる項目は、逆転処理し、大学卒業者と中退者の項目毎のスコアを算出した（Table 2）。Grit 因子である「努力の粘り強さ」のうち「困難にめげない」、「勤勉である」の 2 項目は、$p<.05$ となり、大学卒業者と中退者に有意な差があったが、その他の因子相関の有意確率は小さかった。一方で、Grit 尺度は、2 つの因子からなる合成特性（Grit スコアの平均値）を扱うことから因子間相関の値が小さい場合でも許容するとされており[18]、本稿も許容することとした。

Table 1 Grit 尺度因子分析結果

質問番号	1	2
1	.814	.151
2	.895	.114
4	.743	.361
7	.660	.128
3	−0.19	.812
5	−0.53	.858
6	−.321	.762
8	−.409	.650

因子抽出法：最尤法
回転法：プロマックス回転

Table 2 各項目平均

質問番号	項目	因子	大卒者(SD)	中退者(SD)
1	始めたことは、何であれやり遂げる	努力の粘り強さ	3.26(1.06)	3.10(1.07)
2	頑張りやである	努力の粘り強さ	3.30(1.09)	3.14(1.10)
3	終わるまでに何カ月もかかる計画にずっと興味を持ち続けるのは難しい※	興味の一貫性	2.75(1.02)	2.86(1.12)
4	困難にめげない	努力の粘り強さ	3.19(0.95)	2.79(1.02)
5	物事に対して夢中になってもしばらく すると飽きてしまう※	興味の一貫性	2.79(1.02)	2.76(1.08)
6	いったん目標を決めてから、後になって別の目標に変えることがよくある※	興味の一貫性	2.76(0.97)	2.79(1.04)
7	勤勉である	努力の粘り強さ	3.06(1.07)	2.72(1.05)
8	新しいアイデアや計画を思いつくと以前の計画から関心がそれる※	興味の一貫性	2.73(0.98)	2.75(1.10)

※逆転処理

8. 考察

先行研究では、Grit スコアによって中退予測が可能であることが示唆されている。具体的には、専門学校の休退学者及び欠席の多い学生の Grit スコア 2.83、就学状況に問題のない学生は 3.06 と、休退学者及び欠席の多い学生の Grit スコアが、就学に問題のない学生に比べ低いという結果から中退予測可能性が示され、Grit スコアから中退リスクのある学生を事前に把握し、より良い指導を行っていくことの可能性が示唆されている[17]。本稿においても大学中退者の Grit スコアの方が大学卒業者よりも低いという結果となり、中退リスクのある学生の事前把握に Grit 尺度を用いることの可能性が示唆された。

本稿では、大学中退者と大学卒業者に Grit スコアの調査をおこなったが、これまで大学中退者に Grit 尺度を用いた調査は行われておらず、大学生を対象とした先行研

究の結果と本調査の結果を比較した。先行研究における大学生のGritスコアは、3.14[19]、2.93[31]、2.88[32]であった。本調査におけるGritスコア平均は、大学卒業者2.98、大学中退者2.87という結果となり（Table 3）、いずれの先行研究の大学生のスコアよりも本調査の大学中退者のスコアが低い結果となった。

他方、Gritスコア平均値及び2つの因子いずれも大学卒業者が中退者スコアを上回る結果となったが（Table 3）、Gritスコア平均値では、大卒者と中退者の有意な差は見られず、Grit尺度の2つの因子「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」を用い、因子別の比較を行った。「興味の一貫性」は、大学中退者 2.72、大学卒業者2.77、「努力の粘り強さ」は、大学中退者 3.01、大学卒業者 3.12 と大学中退者のスコアが大学卒業者よりも低かった。Duckworth（2016）は、「努力の粘り強さ」スコアが、「興味の一貫性」スコアよりも高いことが多く、このことは先行研究の共通するパターンであるとし、「努力の粘り強さ」と「興味の一貫性」は同じものでないことを示している[20]。本稿においても大卒男女の「努力の粘り強さ」が「興味の一貫性」よりも高かった。他方、性別でみると「努力の粘り強さ」において大学を中退した女性（3.07）が大学を卒業した女性（3.03）をわずかに上回っていた。この点については、大学生を対象としたGrit関連の先行研究において、回答者の自認や謙虚さの影響を受けた可能性が示唆されており[33]、本稿においても同様の影響を受けた可能性がある。

畑本ら（2019）は、専門学校生の休退学者を対象とした研究において、Grit は平均値を用いることになっているため、項目毎で有意差が認められなかったとしても結果として平均値でGritスコアに差があれば有意差があるとしている[17]。本稿の結果をGritスコアの平均値でみた場合、先行研究の就学に問題のある学生と問題のない学生の結果[17]同様、大学卒業者に比べ大学中退者のGritスコアが低いという結果であり、大学中退者は、大学卒業者に比べやり抜く力が低い傾向にあるといえる。

Table 3　Gritスコア結果

対象	Gritスコア平均値	標準偏差	興味の一貫性	努力の粘り強さ
大卒者	2.98	0.46	2.77	3.12
中退者	2.87	0.60	2.72	3.01

先の中退理由に関する調査から、中退は「学生生活不適応・修学意欲低下」によることが多いとされているが、組織適応の実証研究において、組織適応と情緒コミットメント（会社への愛着等）、仕事のやりがい（成長している実感等）、上司や同僚からのフィードバックと組織適応には関係があり、組織不適応が離職につながることが明らかになっている[34]。大学を組織、離職を中退と捉えた研究では、中退に影響する要因を学業、忠誠心、専攻、目標達成、進路変更機会等とし、目標達成は、教育的願望の欠如に影響を受けることを示している[11]。また、教員とのコミュニケーションは、学生の学習意欲を高め、大学生活の満足度にも影響すること[35]、学生の大学適応には、学習面と対人関係面の2側面の充実を意図した心理教育的援助サービスの充実が必要であることが示唆されている[36]。学生が大学に適応するには、フィードバック、コミュニケーションといった人的支援、コミットメント、やりがい、目標達成といった意欲に対する支援が必要であるといえ、学生の学業継続においても適応が不可欠であるといえる。

他方、学生にきめ細かな支援を行うことは容易ではなく、支援が必要な学生を早期に発見し、支援することが有益とされている。先行研究では、中退リスクの高い学生を早期発見し、対象の学生に大学が介入することで学生と大学の関係を構築し、両者のコミットメントを強化することが学生の学業継続に有効であることが示唆されている[37]。日本の大学においても中退リスクのある学生の早期発見、早期支援が行われており、その方法は、学生の成績や単位取得状況といった教育データから学生を抽出している[13]。一方で、教育データだけで学生の問題を捉えるのは難しいことが指摘されており[14]、現状において、中退者が減少していないことや多様な学生の入学により従来型の支援の見直しが必要であるといえる。

本稿の結果から中退リスクのある学生の把握にGrit尺度を導入する可能性が示唆されたが、本稿の結果は、大学中退者と大学卒業者の有意差が小さくGrit尺度の項目のみではなく、別の項目を加えた尺度を検討することが必要といえる。Duckworthら（2007）は、米国陸軍士官候補生のプログラム修了可能性に関するGritとパーソナリティ特性を測るビッグファイブ（Big Five）を用い、プログラム修了が、Grit と個人特性とに高い相関があることを示しており[16]、Grit尺度の項目以外の個人特性を測る尺度を用いることでより有効な結果を得ることができるといえる。

先行研究及び本稿において、Grit の 2 つの因子の比較

では「興味の一貫性」よりも「努力の粘り強さ」スコアが高いという結果であった。「努力の粘り強さ」の項目は、「始めたことは、何であれやり遂げる」、「困難にめげない」といった目標に向かって努力することを問う内容となっており、「努力の粘り強さ」のスコアが高い者は、目標に向かって努力する傾向にあるといえる。本稿の結果では、大学中退者は、「努力の粘り強さ」のうち「困難にめげない」のスコアが低く、中退リスクのある学生の早期発見において、困難に関する質問項目を加えることが有用といえるのではないか。先行研究において「大学不適応感」と「授業理解の困難さ」の関連性が示唆されており [8]、学生にとって大学での困難さが中退に影響することがうかがえる。また、中退リスクのある学生への支援では、困難を乗り越える力を育むことが学業継続につながる可能性があるといえよう。

本稿の限界については、大学中退者と大学卒業者の有意差がわずかであり、今後は、縦断的調査を行うことや Grit 以外の非認知特性と Grit の関連の検討を行っていくことが望まれる。

参 考 文 献

1) 旺文社 教育情報センター「今月の視点-167」 https://eic.obunsha.co.jp/resource/viewpoint-pdf/202011.pdf 最終閲覧 2022 年 9 月 2 日

2) 文部科学省「学生の修学状況（中退者・休学者）等に関する調査（令和 3 年度末時点）」 https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf 最終閲覧 2022 年 9 月 2 日

3) 白鳥成彦、大石哲也、田尻慎太郎、森雅生、室田真男「中退確率の遷移を用いた中退学生の類型化」『日本教育工学会論文誌』44 巻・1 号 pp. 11-22 2020 年

4) 白鳥成彦「日本における中退防止施策の類型化」『大学情報・機関調査研究集会論文集』pp. 100-105 2020 年

5) 独立行政法人労働政策研究･研修機構『大学等中退者の就労と意識に関する研究』JILPT 調査シリーズ No. 138 2015 年

6) 文部科学省「新型コロナウイルスの影響を受けた学生への支援状況等に関する調査」 https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_kouhou01-000007001-1.pdf 最終閲覧 2022 年 9 月 5 日

7) 内田千代子『大学における休・退学、留年学生に関する調査 第 28 報』茨城大学保健管理センター 2009 年

8) 中村真、松田英子「大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響－出席率、GPA を用いた分析－」『江戸川大学紀要』25 号 pp. 135-144 2015 年

9) 松井洋、中村真、田中裕「大学生の大学適応に関する研究」『川村学園女子大学研究紀要』 21 巻・1 号 pp. 121-133 2010 年

10) 大久保智生「青年の学校への適応感とその規定要因 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討」『教育心理学研究』53 巻・3 号 pp. 307-319 2005 年

11) Bean, John P. “Interaction effects based on class level in an explanatory model of college student dropout syndrome.” *American Educational Research Journal*, Vol 22 (1) , pp.35-64 , 1985

12) 千島雄太、水野雅之「入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響－文系学部新入生を対象として－」『教育心理学研究』63 巻・3 号 pp. 228-241 2015 年

13) 白鳥成彦「中退防止における 2 つの IR アプローチ：高大接続アプローチと教学アプローチ」『大学情報・機関調査研究集会論文集』p. 106-111 2018 年

14) 高岡祥子、中井あづみ、杉山恵理子、野末武義、清水良三「学生の修学データを活用した多角的な学生支援の提案：要注意学生の早期発見と学生相談との協働」『明治学院大学心理学紀要』27 巻 pp. 81-93 2017 年

15) Gerdes, H., & Mallinckrodt, B “Emotional, social, and academic adjustment of college students: A longitudinal study of retention.”, *Journal of Counseling & Development*, Vol 72 (3) , pp.281-288, 1994

16) Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. “Grit: Perseverance and Passion for Long–Term Goals.” *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 92 (6), pp.1087–1101, 2007

17) 畑本大介、鈴木真紀子「本校学生における Grit と就学状況の関係」『臨床検査学教育』11 巻・2 号 pp. 227-249 2019 年

18) 藤原寿幸、河村茂雄「小学生の Grit（やり抜く力）と学級適応・スクールモラール・ソーシャルスキルとの関連の検討」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』27 号-1 pp. 83-92 2019 年

19) 竹橋洋毅、樋口収、尾崎由佳、渡辺匠、豊沢純子

「日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』89 巻・6 号 pp. 580-590 2019 年

20）アンジェラ・ダックワース著、神崎朗子訳『やり抜く力 ー人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』ダイヤモンド社 2016 年

21） Duckworth, A. L., & Quinn, P. D., "Development and validation of the Short Grit Scale (GRIT–S)." *Journal of Personality Assessment,* 91(1), pp.166–174, 2009

22） Eskreis-Winkler, L., Shulman, E. P., Beal, S. A., & Duckworth, A. L. "The grit effect: predicting retention in the military, the workplace, school and marriage." *Frontiers in Psychology*, 5:36, 2014

23）川西諭、田村輝之「グリット研究とマインドセット研究の行動経済学的な含意ー労働生産性向上の議論への新しい視点ー」『行動経済学』12 巻 pp. 87-104 2019 年

24）清水優菜「Grit と達成目標、数学の成績の関係」『日本教育工学会論文誌』42 巻・Suppl 号 pp. 137-140 2018 年

25）本多麻子「達成と情熱のポジティブ心理学的検討：Grit、レジリエンス、楽観性の関連」『研究紀要 東京成徳大学人文学部・応用心理学部 研究紀要委員会 編』27 号 pp. 87-98 2020 年

26）大矢薫、石村郁夫「臨床実習をやり抜く（Grit）ための要因に関する文献研究」『東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究』19 号 pp. 189-196 2019 年

27）井川純一、中西大輔「対人援助職のグリット（Grit）とバーンアウト傾向及び社会的地位の関係——高グリット者はバーンアウトしにくいか?」『パーソナリティ研究』27 巻・3 号 pp. 210-220 2019 年

28）文部科学省「大学入学者選抜関連基礎資料集」https://www.mext.go.jp/content/20200318-mxt_daigakuc02-000005103_8.pdf 最終閲覧 2022 年 9 月 1 日

29）朝日新聞社・河合塾教育イノベーション本部「ひらく 日本の大学 2017 年度調査結果報告」https://www.keinet.ne.jp/magazine/guideline/backnumber/17/11/01toku.pdf 最終閲覧 2022 年 9 月 1 日

30）西川一二、奥上紫緒里、雨宮俊彦「日本語版 Short Grit (Grit-S)尺度の作成」『パーソナリティ研究』24 巻・2 号 pp. 167-169 2015 年

31）稲垣勉、澤海崇文、澄川采加、相川充「日本語版グリット尺度の再検査信頼性ーー2 ヵ月間隔の調査から」『パーソナリティ研究』29 巻・3 号 pp. 183-186 2021 年

32）福田昇平、齋藤誠一「学習活動における Grit と目標志向性、自己調整学習方略との関連 ：「粘り強く考える」「最後まであきらめない」ことの教育心理学的検討」『神戸大学発達・臨床心理学研究』20 巻 pp. 1-5 2021 年

33）佐藤手織「大学生の Grit および自尊感情と GPA との関係性」『八戸工業大学紀要』38 巻 pp. 10-14 2019 年

34）尾形真実哉『若年就業者の組織適応: リアリティ・ショックからの成長』p. 185 白桃書房 2020 年

35）見舘好隆、永井正洋、北澤武、上野淳「大学生の学習意欲、大学生活の満足度を規定する要因について」、『日本教育工学会論文誌』32 巻・2 号 pp189-196 2008 年

36）武蔵由佳、河村茂雄「大学生における学校生活満足度と学校生活意欲との関連」、『教育カウンセリング研究』7 巻・1 号 pp. 35-44 2016 年

37）Alan Seidman "College Student Retention: Formula for Student Success." Greenwood Publishing Group, 2005